

# 「被爆80年人材育成特別プログラム」に参加して

中央大学法学部法律学科2年  
中岡 宗大



受講風景

## 《プログラム概要》

2025年8月より12月にかけて、へいわ創造機構ひろしま（HOPE）主催の「被爆80年人材育成特別プログラム」が行われた。本プログラムは広島県内の高校・大学に通う学生ないし広島県出身で県外の高校・大学に通う学生を対象に、様々なプログラムを通して若い世代が核兵器に関する知識を深め、発信活動を通して核兵器のない平和な世界の実現に向けた足がかりをつく

ることを目的として行われた。3名の大学生と7名の高校生からなる計10名の若者が参加し、様々なプログラムを通して自身の知見を深め、広げた。また、アドバイザーとして一般社団法人「核兵器をなくす日本キャンペーン」の浅野英男氏、広島大学平和センター准教授の戸崎洋史氏を迎えた。

プログラムは主に、3つの行程で構成されている。1つ目は広島県内で行われた事前研修。専門家の講師から講義を受け、核兵器にまつわる幅広い分野の知識を吸収した。2つ目はアメリカへのフィールドトリップ。アイダホ州でアイダホ大学の学生と交流し、意見を交換した。さらにワシントンD.C.では4つのシンクタンク

を訪問し、質疑応答を通して様々な見解を吸収した。3つ目は広島県内で行われた最終成果発表会。それまでのプログラムで得た知識や経験を活かして作成した「核兵器が使用された際のワースト・シナリオ」を発表し、その回避策を提言した。参加者はプログラム後も発信を続け、本プログラムでの学びを活かした活動をしている。



ワシントンD.C.にて

## 《事前研修》

8月25日から29日にかけて広島市内で行われた事前研修。参加者はここで受けた講義を通して安全保障や核兵器問題の実情、医療や国際的な平和運動などに至るまで、幅広い分野の知識を横断的に学んだ。専門家の講師は、高見澤將林氏（元軍縮会議日本政府代表部大使）・川



活発なディスカッション

野徳幸氏（広島大学平和センター教授）・鈴木達治郎氏（元長崎大学核兵器絶研究センター〈RECNA〉センター長）・西田充氏（長崎大学多文化社会学部教授）・川崎哲氏（Peace Boat 共同代表、ICAN 国際運営委員）など。講義後にいくつかの班に分かれてディスカッションを行い、参加者は闊達な議論を行って多様な意見を交換していた。また、この事前研修期間中に最終成果としてのワースト・シナリオ制作を開始し、得た知識を実際に活用させていた。

### 《フィールドトリップ》

9月14日から21日にかけて参加者はアメリカに向かい、様々な研修を行った。まずはアイダホ州へ。被爆者の小倉佳子さんや、広島大学とつながりがあるアイダホ大学で日米の学生たちが交流を行った。アイダホ大学の構内を散策したり、昼食をともにしたりするなどの交流を深めるとともに、講義をともに受講して意見を交換しあった。また、本プログラムの参加者10名からも、プログラムの説明や広島県の被爆の実相の説明などがアメリカの学生たちに向けて行われた。最後に行われたクロージング・セッションでは各班内でメンバーが各々「講義で得た各自の平和への想い」を一言で表し、共有した。

その後メンバーはワシントン D.C. へ。4つのシンクタンクを訪問し、質疑応答を通して知見を深めた。多様な意見に触れながら、参加者はこの問題の奥深さや難しさを実感していたようだ。また、シンクタンク訪問終了後はウドバー・ハジー・センターに向かい、広島に原子爆弾を投下したエノラ・ゲイ（実物）を視察した。全ての過程を終え、各々が貴重な経験を携えて帰国した。

### 《最終成果発表会》

12月14日に広島市内で最終成果発表会が行われた。メンバーで話し合いながら制作してきた「核兵器が使用された際のワースト・シナリオ」と、その回避策として政府などの大きなレベルから私たちという小さなレベルまでそれぞれができることを提案した。広島県の横田美香知事も臨席する中、各自が自らの言葉で力強く平和への想いと現状への危機感を訴えた。また、広島県内外で活躍する4人のユースを迎え、ワースト・シナリオに関する意見を共有する場となった。



アイダホでの集合写真



シンクタンクでの様子



エノラ・ゲイ



発表会での集合写真

## 《ワースト・シナリオ》

### 核兵器が使用されるまでの経過

#### 登場国概要

国名 主な概要

#### A 地域

- ・ B 国領土内にある自治政府、この地域に住む住民の中にはこの地域が独立した国であると主張する人が多数存在する。
- ・ 経済活動に不可欠な物資で世界的にシェアが高い。

#### B 国

- ・ 核兵器国
- ・ A 地域を自国の領土と主張する国

#### C 国

- ・ 核兵器国（A 地域を支援）

#### D 国

- ・ 領土内に C 国の基地や軍の施設がある。

#### E 国

- ・ 核兵器国
- ・ B 国と同盟国

### 国内問題が国際対立へと拡大

20XX 年、B 国の領土内にある A 自治政府では若年層を中心に「自分は B 国の国民ではなく A 自治政府の国民」と認識する人が増え、独立志向が着実に強まっていた。C 国が A 自治政府を事実上支援する姿勢を見せる中で、A 自治政府の政権は「今こそ独立の機会」と判断した。

世論調査の後押しを受け、国名や憲法改正、住民投票を視野に入れた準備を開始する。政権内部には派閥間の不満も残っていたが、自国第一主義の旗を掲げつつ「国際的な流れに沿った独立」を訴えることで世論を固めた。

これに対し B 国は強く反発し、当初は A 自治政府への経済制裁や外交圧力を強め、同時に A 自治政府を支援する C 国をはじめとした周辺国にも牽制的な発言を繰り返したが、やがて大規模な軍事演習へと拡大し、A 自治政府包囲を思わせる動きを取り始めた。

A 自治政府近隣で緊張感が高まる中で、A 自治政府の製品の輸出は全て停止した。特に A 自治政府は経済活動に不可欠な物資で高いシェアを誇っており、主要国の多くの産業は大きな打撃を受けた。

C 国大統領は自国の法と政治的判断に基づき、A 自治政府への武器の供与及び兵力の派遣を決定した。周辺地域の安全を脅かす事態の発生を受けてさらなる自陣営の強化を図りたい C 国は、D 国をはじめとする主要な同盟国に対して、応じなかった場合には同盟関係の見直しを検討するなどの強い姿勢で協力を要請した。各国が軍事力を駆使して合同で A 自治政府防衛に当たることを宣言した。

A 自治政府周辺で繰り返される大規模な軍事演習は A 自治政府を取り囲む形での陸海封鎖を狙うことを目的としていると見られる。B 国軍の艦艇や戦闘機が A 自治政府領空・領海の

すぐ近くまで接近する中で政府の混乱やC国の支援撤回を装うソーシャルメディアを活用したフェイクニュースの拡散などの認知戦が展開された。

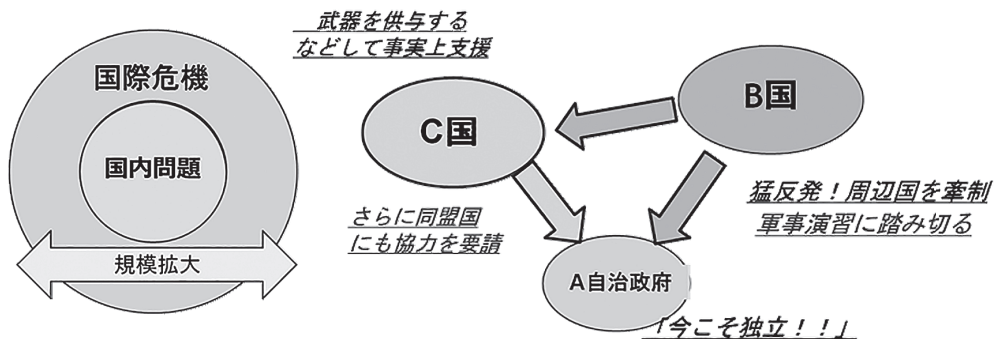
その結果、A自治政府や軍の意思決定や指揮系統は混乱し、防衛対応が遅れやすい状況になっていた。

その頃、A自治政府防空レーダーは電波妨害の影響を受けB国軍機の動きを「巡航ミサイルによる攻撃」と誤検知した。それにより防空レーダーは自動的に迎撃態勢入り、現場の指揮官は確認時間がわずかしか与えられないため航空機に向けた防空ミサイル発射の決断を下した。

これが偶発的に「A自治政府側の先制攻撃」となり、B国軍は即座に大規模反撃に踏み切った。さらにB国はA自治政府のインターネットを世界から切り離す「サイバー封鎖」を行った。

こうした一連の偶発的行動により、A自治政府領内ではB国と、A自治政府の艦隊・戦闘機が交戦。

在D国C国軍基地からもC国軍機が頻繁に出撃した。そのため、D国領土周辺の空域も巻き込まれ空爆のリスクが拡大して事態は一気に局地紛争から地域紛争へと発展した。



### 情報混乱と誤認による偶発的な武力衝突

通常であれば誤検知や誤認、誤射などは再発防止のため運用が強化されるはずだが、極度の緊張下では兵士や司令部の判断は不安定になり、誤情報への過剰反応で二度三度と誤爆が続いた。当面の間は通常兵器で攻撃を繰り返すが、事態の転換点となったのは軍事施設を標的とした攻撃が住宅密集地への誤射を招いたことだった。

ついに民間人にまで被害が及んでしまったのである。これを機に双方の攻撃は本格化し、エスカレートしていった。

通常戦力で優勢にあるB国は、次第にA自治政府、C国・同盟国を圧倒していくなかで、C国は事態を打開すべく、ついにC国大統領が限定的な戦術核使用を決断した。これはC国内での強い政治的圧力に加えA自治政府やC国の同盟国の要請もふまえたものであった。

人道批判を避ける目的かつ多少の被害を出すために主要都市ではなくA自治政府周辺に展開するB国の空母など海軍の艦艇を標的として使用された。被害としては海洋汚染や船舶の損傷、数百人の兵員の死亡といった程度だったが、B国はこれを国家への挑戦ととらえ自国も核報復へ踏み切った。

### 限定核使用は、報復の連鎖で全面核戦争へと拡大

限定的核使用は「最初の一発」を契機に数週間で連鎖的に拡大した。

C国は、さらに追加の核攻撃を行った。C国側の核使用は次第にターゲットが都市近郊の軍事基地になり、その結果基地周辺に住む民間人などにも被害の規模が拡大した。

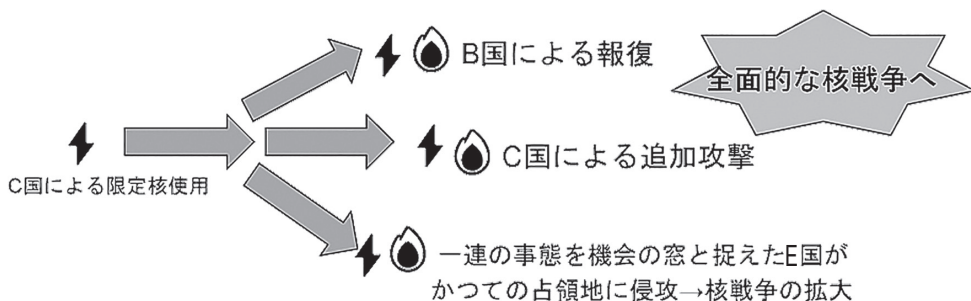
これを受けたB国はC国への報復の選択肢を広げるため次第にターゲットを拡大させる。ついにC国同様、戦術核の使用と軍事基地だけでなくC国内の大都市近郊の軍需・輸送ハブなどへの攻撃を決断した。

両陣営の報復や迅速な意思決定が繰り返され、百発以上の低威力核兵器を含め戦術・戦域核兵器が数週間から数か月の間に投入される。B国側のC国本土周辺の海への攻撃を受け、C国は同国と軍事的同盟関係にある国々に支援を要請し、周辺地域にも段階的に物資などの支援から軍事的支援へと関与を深めた。

E国はこれを「機会の窓」と判断し、C国と軍事同盟のある国のE国がかつて統治していた地域に侵攻を開始する。結果として地域衝突が世界的衝突に転化してしまい核の使用がさらに拡大した。技術面ではAIによる自動目標選定や意思決定支援、新型モデルの無人機群といった新兵器が作戦の速度と誤認の危険を高める一方であった。

C国はより効率的な核の使用のためD国にあるC国軍事基地からの核の発射を要請した。D国ではC国に核兵器を配備するよう迫られたことを受け、激しい議論が展開された結果、その配備を受け入れるとの大きな政策転換を決定するといった局面も生じた。

こうした流れは核兵器使用の連鎖を生み、初めは軍事施設への攻撃だったものが都市部へと拡大し、多数の死傷者に加え広域に及ぶ社会・経済機能の崩壊を招く。



都市は焼け、医療や電力網は崩壊し、病院や物流は沈黙した。SNSも通信も途絶え、人々は互いの安否さえ確かめられない孤立に追い込まれる。

核戦争のシナリオでは敵の核戦力・基地をはじめとする軍事施設が優先的に狙われるとされるが、実態は違っていた。広島や長崎の史実が示す都市被害の惨状を思えば、被害の規模は計り知れない。

やがて火災と放射線が空に舞った塵が地球を覆い、太陽光が遮られ気温は急激に低下する。北半球の農業やインフラ、都市機能が壊滅し、北半球と相互依存の関係にある南半球の経済も連鎖的に崩壊し、飢饉が発生。さらに森林や河川、海洋の循環も乱れ、生態系の崩壊が連鎖的に広がった。文明の終焉は、社会の破壊だけでなく、気候と地球環境そのものへの深刻な影響と不可分だった。

## 核兵器の使用に直面した個人の証言

私は今日もいつもと変わらない朝をすごしていた。

友達とカフェに行く約束をして、母が「夕飯カレーだよ」と笑っていた。その笑顔を、何の気なしに見送った。

昼すぎ、スマホの通知が鳴り止まなくなった。

《B国がA自治政府周辺で軍事行動》《C国が軍隊を派遣》《D国も防衛準備に入る》SNSでは「ミサイルがD国に落ちた」「政府が隠してる」など、噂と動画が次々に流れてきた。

「本物?」「フェイクらしいよ」誰も本当のことを知らなかった。でも、街の空気だけが、いつもと違っていた。空を見上げたとき、黒い機体がいくつも飛んでいた。胸がざわついた。その瞬間、スマホが震えた。《緊急速報：避難してください》光。音。熱。何が起きたのか分からなかった。

世界が一瞬で真っ白になって、次に見た景色は、瓦礫と煙に覆われた街だった。

「家に帰らなきゃ」それだけを考えて必死に走った。

信号は倒れ、道路は割れ、焦げた匂いが風に混じっていた。電線が垂れ下がり、火花が散っている。スマホを取り出したけど、電波はもちろん繋がらない。家族に連絡しても、友達にメッセージを送っても、誰からも返信はこなかった。

「〇〇市が壊滅した」「核が使われた」「助けに行くな」誰かが「それは嘘だ」と反論して、コメント欄は罵り合いで埋まっていた。世界が壊れていく中で、画面の中も壊れていった。それでも私は、家に向かって歩き続けた。やっと家に辿りついたが、そこには何もなかった。屋根も、窓も、花の鉢も、すべてが灰になっていた。名前を呼んでも、返事は風に消えた。空は灰色で、太陽は見えない。ただ、冷たい風が吹いていた。

その中で、私は立ち尽くしたまま、壊れた街を見つめていた。もう、どこにも帰る場所はなかった。孤独と恐怖の中で、ただ大切な人の無事を祈るしかなかった。大きな光とともに私の世界は消えた。世界は真っ赤で、泣き声が絶え間なく聞こえ、大きなビルも崩れて空が大きく見える。黒くて、濁っていて、希望のない空。私はこれからどう生きていけばいいのか。

私は、灰の街を歩き続けた。どこかで救護所があると聞き、人の流れを追った。

焼け焦げたビルの一角に、「臨時医療センター」と書かれた布がかかっていた。中には、包帯を巻かれた人、呼吸が荒い人、泣き叫ぶ子ども。薬の匂いと血の匂いが入り混じり、空気が重たかった。救護所の片隅にもうほほ顔がわからない友達がいた。

数週間後。避難者は郊外の仮設住宅に移された。私の体には、原因の分からない発疹や脱毛が始まっていた。

私はニュースで見た。

「被爆したと思われる患者が増加」「政府、被爆者の支援せず」

街では、ささやかれ始めた。

「被爆した人とは距離を置け」「感染するらしい」「同じ避難所にいるのは危険だ」

新しく通うことになった学校では被爆した人だけ別の教室に置かれた。最初は30人いたクラスも、一年後学校に来る人は15人にまで減った。

私がスーパーに行くと、店員が無言でビニール手袋をはめた。友人にメッセージを送っても、既読はつかなかった。仮設住宅のドアに、スプレーで赤い×印が描かれていた。誰がやったのかは分からない。でも、それが意味するものは分かっていた。

## 核戦争の影響

### 国際情勢

A 自治政府の独立を巡る紛争から始まった核戦争は、世界規模で文明を揺るがした。

長年にわたって最終的には機能すると誰もが信じていた核抑止が一気に崩壊したことにより、国家間の外交的信頼は引き裂かれた。さらに、国連を始めとする国際機関が停戦や和平交渉の糸口を示せなかった結果、国際社会は調停の道を失った。

### 各国の状況

各国（保有国、非保有国問わず）は自国の生存と利益を最優先に掲げ、都市には行き場を失った避難民が溢れた。治安は急速に悪化し、至る所で武装集団や略奪者、闇市が横行し始める。被災者には差別の目も向けられ始め、やがて人々は常に互いを疑い、暴力と混乱が日常を覆い尽くすようになった。

### 個人への影響

核戦争がエスカレーションしていく中でC国は、兵器庫最大の爆弾をB国領土に投下した。これは1945年広島に投下されたリトルボーイの約80倍の威力とも言われており、たった1発で150万人超が死亡した。（爆心地近くでは爆風と熱線により数秒から数分のうちに焼失・圧死する者が大半を占め、周辺地域でも深刻な熱傷や大量出血が医療崩壊の中で治療を受けられないまま死亡する）。

核抑止が破綻した今、もはや核戦争を止められるものなどなく、使用される核兵器は数百発規模に膨れ上がった。即時被害のみに目を向けても、全世界で2億人以上が命を落とした。

その上に、放射性降下物による急性被曝、医療・物流の崩壊、そして都市火災が大気へ送り込む煤による気候影響が重なり、数年から数十年のスパンでの飢餓・疫病によりさらに数億から数十億の命が失われていった。また被爆後の後遺症として発症する各種のがんや白血病によって、長期的にはさらに数千万から一億人規模の死者が生じる。核兵器の恐怖は何年たっても終わらないのだ。

### 核戦争のその後

XX年後世界は灰と化し、家族や友人の安否も依然として分からない。日常は奪われ、夢や希望すら消え去った。残された人々は灰色の世界で苦しみながら生きていくしかない。

### むすびに

核兵器は一度使われれば人類の存続そのものを脅かし、核抑止は破局を先延ばしにするだけで、恒久的な平和は保証されない。80年前とは違い被害の知識は高まったが、もし人々が無関心で軽率な世論を形成すれば、指導者は押し流され、再び破局へと進んでしまうだろう。だからこそ一人一人が意識を持つことが不可欠だ。

被爆から80年。今もなお多くの被爆者や若者が核廃絶に向けて声を上げ続けている。80年たった今だからこそ私たちにできることが必ずある。

では、あなたはどう行動するのだろうか。核抑止や核のタブーが守られなくなる時が訪れるかもしれない。では核が使われるはずがないと考えていて、本当に良いのだろうか。

問い直す時は今である。

未来を変えるのは、今を生きる私たちだけなのだから。（公开发表会動画はこちら⇒）



## 《私が核問題に興味を持つまで、このプログラムの参加動機》

本稿を執筆させていただきました、中央大学法学部法律学科2年生の中岡宗大と申します。私は父方が生粋の広島の家系であり、私自身も生まれてから5年半ほど広島県に住んでいました。それゆえ私が関東に引っ越してからも、父は私に核兵器の恐ろしさについて語り聞かせてきました。小学生の夏休みの課題の読書感想文で題材を選ぶ本も、父のアドバイスの影響で戦争や核兵器に関するものがいくつかあり、埼玉県の読書感想文コンクールに6年間で2回入選した際の題材に選んでいた本はどちらも平和を内容とする本でした。中学生・高校生でもその興味は持ち続けていましたが、実際の行動に移ったのは大学生になってからのこと。中央大学の「核におおわれた世界」という授業を履修したことがきっかけでした。履修登録の際に偶然見つけたに過ぎない授業でしたが、そこでの出会いが今の私に大きな影響を与えています。この授業は中央大学の専任講師と外部の非常勤講師からなる3人の先生方によって展開されている授業なのですが、その一人がJALANA理事の一人である山田寿則先生でした。そして山田先生が授業で紹介してくださったのが本稿で紹介しているプログラムなのです。私はそれを聞いた瞬間体中に衝撃が走るような感覚を覚え、すぐに応募することを決断しました。広島県に縁のある私が再び広島の若者の意見に触れ、そしてアメリカ人の意見にも触れることができる、こんな貴重な機会は二度とないと思いました。今思えば、このプログラムは「被爆80年」と冠している通り1回きりの試みであり、万が一履修が一年でもずれていれば出会えなかったかもしれません。不思議な縁に導かれたようにも感じます。そして幸いにも合格させていただきました、今回のプログラム参加に至りました。

## 《最近の私の取り組み》

このプログラム参加をきっかけに私は多くの取り組みを始めました。まずはこのJALANAへの加入。将来は法曹を志している私ですので、核廃絶（平和活動）と法曹としての立場を結び付けることができるこの協会に大変魅力を感じました。また、多くの人の意見に触れるために様々な場所に足を運ぶようになりました。特に2025年は被爆及び終戦から80年という関係上、盛んに原爆展が行われており、その中の一つに足を運んで主催者の方と多くの話をさせていただきました。また、11月に衆議院議員会館前で行われた政府へのTPNW参加請願集会で出会った反核医師の会の方を通じて、本誌でもインタビューが掲載されている松久凌大さんと出会い、お話しする機会を持たせていただきました。また、本プログラムの紹介は中央大学多摩キャンパス内にある「法と正義の資料館」でも、学生による展示という形で行わせていただきました。また、不思議な縁はこれに留まらず、私が池袋を歩いていた際には「群衆の渦」という団体と出会いました。彼らはおよそ50年前から被爆者のために鶴を折る活動を続けており、それと同時に「8月6日・9日を人類総ザンゲの日として国民の祝日に制定せよ」という合体標語を掲げて訴えを続けています。わたしも彼らに出会ってからは定期的に鶴を折って平和への想いを確かめ続けています。これからも多くの経験を求めて活動していく所存です。